

氏名	NADINE CAROLINE FRANKLIN (ナディーーン キャロライン フランクリン)
学位の種類	博士(造形)
学位記番号	博第53号
学位授与日	2025年3月14日
学位授与の要件	学位規則第3条第1項第3号該当
論文題目	現代における神秘的なシンボル「光輪」の表現 —自作のなかの光輪の変遷を中心に—
審査委員	主査 武蔵野美術大学 教授 水上 泰財 副査 武蔵野美術大学 教授 新見 隆 副査 武蔵野美術大学 教授 村上 博哉 副査 元東京学芸大学教育学部教授・画家 河村 正之

内容の要旨

本論文では、「光輪」という神秘的なシンボルをテーマに、美術史における光輪の様々な種類やその変遷、現代美術やポップカルチャーにおける光輪の新たな表現、そして光輪が使用され続ける理由について考察する。また、自作における「光輪」の表現を中心に、私が光輪を引用・使用してきた過程や、光輪の普遍性についても述べる。

「光輪」とは何かを簡単に定義すると、仏教美術やキリスト教美術などの宗教美術において、神仏の頭上後方に描かれる光の円形表現を指す。形や種類は様々であるが、一般的には、人物の頭後方にある金色のお皿のような表現や、頭部の周囲を囲む輝く光の輪、いわゆる「天使の輪」として描かれることが多い。

私は、アメリカの大学で学部3年生のときに「光輪」というシンボルに初めて興味を持ち、その頃から現在に至るまで、自作の中で光輪を表現し続けてきた。本研究は、「なぜ私は光輪をどうしても描きたいのか」という問いから始まったのである。

その答えを探するために、最初に「光輪」の歴史を探求し、古代エジプトや古代インドの美術から、ビザンティン美術やルネサンス美術まで、世界の宗教美術における光輪の表現を追う。次に、19世紀および20世紀における光輪の復活、すなわち象徴主義やアールヌーボー、表現主義や抽象表現主義における光輪の表現を探る。その歴史に基づき、現代アートやポップカルチャーにおける光輪の表現を分析し、光輪の新たな種類と、光輪が流行する理由を提案する。最後に、自分の制作方法を明らかにし、博士後期課程に入ってから制作したすべての作品のコンセプトを述べ、自作の中で光輪がどのように変化してきたかを考察する。

第一章では、自分の個人的な背景を踏まえ、光輪に興味を持ったきっかけを述べる。そ

これは、私がアメリカのウェルズリー大学で学部3年生の頃、ジャン・ポール・ゴルチエの2007年春夏ファッションショーのデザインをSNSで見た経験に基づいている。彼のデザインでは、キリスト教美術からインスピレーションを受け、ファッションショーのモデルが一人ひとり、衣装のデザインに合わせた光輪を頭につけている。それらの光輪に魅了され、当時の学部論文と卒業制作を「光輪」というテーマで行ったのである。

第二章では、光輪の歴史の概要をわかりやすく説明する。まず、マルト・コリネ・グランが述べる「原始的な光輪」の表現について解説する。これは、宗教美術における本格的な光輪の表現が現れる前に、世界中の古代文化に見られる円型の美術表現を指す。次に、西洋美術と東洋美術における光輪の主な形式や事例を挙げる。例えば、仏教美術では、古代インドのガンダーラとマトゥラーでは同時に仏像の表現が生まれ、仏に光輪が付けられるのである。また、キリスト教美術では、古代ギリシャ神話の美術から影響を受け、光輪というシンボルが引き継がれるのである。

次に、光輪が一時的に消えた後、19世紀および20世紀に復活した過程を踏まえ、例えば象徴主義、アールヌーボー、表現主義、抽象表現主義の中での光輪について述べる。特に、20世紀初期に生まれた抽象表現の中における「抽象的な光輪」、すなわちスピリチュアリズムやオカルティズムに影響された、神秘的な意味を持つ抽象的な円型の表現について論じる。その実例として、私が最も魅力的に感じる画家ヒルマ・アフ・クリントの作品における円型の表現と「光輪」との関係性を考察する。

第三章では、現代のアートやイラストレーション、ポップカルチャーにおける光輪の表現に焦点を当てる。これらの光輪は、宗教美術の光輪とは異なり、宗教的な意味を持たず、現代的で多様な形状や色彩で表現されるため、現代に適した新たな種類・意味があると感じる。それを把握するために、私がインスピレーションを受けたSNSで見つけた作者の作品を紹介し、それらの作品に見られる光輪を三つの種類に分類する。また、その分析に基づき、光輪が現代において広く流行する三つの理由を提案する。

第四章では、自分の制作方法・プロセスを踏まえ、博士後期課程に入学してから制作したすべての作品のコンセプトを述べる。それらを紹介することを通じて、自分がどのように光輪の表現を引用し、使用してきたか、そしてその変遷を明らかにする。最後に、私がなぜ光輪を表現することにずっと惹かれてきたのかを三つの視点から解説し、これからの作品展望と光輪の普遍性について考察する。

まとめると、本研究を通じて、私がなぜ光輪を描き続けてきたのかという問いに対する答えだけでなく、光輪が現代において幅広く表現され続ける理由も明らかにする。また、「光輪」の表現が作者と鑑賞者、さらには現代社会においてどのような役割を果たしているのか、すなわち、本研究では光輪の普遍的な魅力を明確にする。

審査結果の要旨

本論文は、ジャンポール・ゴルチェのファッションショーで見た衣装の一部としての光輪に対する興味から始まっている。その後、ウエルズリー大学での卒業制作と卒業論文でも光輪の研究をしており、その弛まぬ好奇心と探究心から国費の留学生として来日し、本学においても修士課程2年の頃から本格的に光輪を扱った作品を発表するようになった。その実践と研究の記録である。

ナディーン博士論文は、第一章の光輪に興味を持ったきっかけから始まり、第二章の光輪の歴史において、「原始的な光輪」、「西洋的、東洋的な後輪」の歴史が語られている。また、16世紀後半から写実的な表現が強調されるようになり、その影響で、非現実的な光輪の表現がしばらく使われていなかったのであるが、19世紀後半から、画家のより自由で個性的な表現活動に伴い、光輪が再び表現手段として使われ始めたことを具体的な例を挙げながら解説している。中でも、最近日本においても注目され始めたヒルマ・アフ・クリントの作家研究をしながら、彼女の自然や宇宙についてのスピリチュアルな意味を考察している。第三章では、今、最も影響を受けている現代の光輪表現について述べられており、現代の作家たちが表現している光輪の新たな種類と、それらの光輪をはじめ、光輪自体が現在流行する理由をそれぞれ三つ提示している。その新たな光輪の種類としては、①現代化された伝統的な光輪②デザイン的な光輪③抽象的な光輪であるとして、その例をそれぞれあげながら解説し、現在流行する理由については、①近年のパンデミックや気候変動、自然災害などによる若者たちの社会的な不安②美しさ、平和、安全を伝える普遍的な円形という形の本質的魅力③長い歴史の中で繰り返される流行の循環などを提示し、独自の見解を述べている。第四章は、自作についてである。ナディーンは、母国アメリカでも光輪をテーマに制作しているが、その頃に比べると当たり前ではあるが、はるかにその研究が充実し、自分自身で手応えを感じていることがよくわかる構成となっており、論文内における作品系列は、個人史としての側面においても面白いものがあった。

以上の構成となっている本論文は、自身の興味を丹念に追求し、考えられる疑問点に素直に向き合っており、それを自身の経験に基づいて論じている点は評価できる。また、光輪という日本人であれば、誰もが一度は目にしたことがあるものに対して、にも関わらず、それ故あまり気にかけることも少ないものに対して、アメリカで暮らす頃から着目し、長年の研究を重ね、それを自身の作品制作の試行錯誤とともにまとめたことは、独自性の面からも大いに評価できる。

一方、作品研究領域は、論文と実作の双方を評価する領域なので、実作についても感想に近い形ではあるが述べておく。

ナディーン作品を、私は5年以上に渡って見ているが、最初の頃のテーマは、主に移動者として見る日本社会と母国との通俗的な風習の違いがテーマであり、それらをカラージュ的手法で表現していた。本格的に光輪と向き合って制作し出したのは、大学院の2年

からであり、まさにコロナ禍のパンデミックを経験した後からであった。その点において、論文に書かれている若者たちの不安と連動した光輪の流行というのは、ナディーンにとっての大きな社会的出来事であり、これまでと、これからを考えた上でも、それは描きたいモチーフであり、描かねばならないリアリティがあったのだろう。しかしながら、長いスパンで作品に見慣れてくると、様式としてのコラージュ的な表現方法は、良い意味でも、悪い意味でも、グラフィカルな印象を受け、レイヤーによる空間表現に物足りなさも感じるのである。論文の中にある文章で、私が一番ナディーンらしい、良い文章だと思ったのは、「私は、どのような作品を描こうとしても、画面の中の世界を現実より謎めいた世界、それは、宇宙に見えるような、自然が多くてキラキラしているような、そんな世界を作りたい。なぜなら、科学的で高度なテクノロジーの多い現代社会においても、私は自然や宇宙とのつながりを感じたいし、だから作品を作ることで、そのつながりを感じようとしているのだ。(p 68)」という部分であるが、で有れば、尚更見るものが感じるこの空間に対する物足りなさは、いずれ解消されなければならない問題ではないかと思った。論文中のヒルマの作品は、そのスピリチュアルで偉大な宇宙空間への問いかけの結果であると感じられるし、神秘性、無限、宇宙、そのようなものを自分自身が感じるためには、具象的説明を省き、抽象的方向に進まざるを得なかったのではないかとも思われるのである。この問題は、審査員の中にも同様と思われる意見があり、光輪という意識をなくして絵画を考える必要性にも触れられていた。いずれにせよ、この空間性に対する問いかけは、ナディーンの、これから描く絵画の、一つの課題と考えてもらいたい。

このように書くと、ナディーンの作品を評価していないように感じるかもしれないが、私は、その移動者としての物語性、強烈な色彩感覚、誤解されがちな光輪表現に対する執着とオリジナリティーを高く評価しており、言わばここでは、ないものを取り上げているのである。審査員も同様の意見であり、公聴会では、その明晰な発表に、私も含めて感心する審査員もいた。実際、ナディーンは青梅の山の中に頻繁に通い、自然の中で一人瞑想し、それを満喫していたし、就職先として選んだ場所は、本州の中で一番寒い長野であり、否が応でも自然を感じざるを得ない。その自然空間、そこでの身体の変化を五感で感じて、自分自身が納得する絵画を求め、今以上の、次のステージに行ってもらいたい。

以上、総合的に判断して主査である私(水上)を含め、審査員全員一致で合格とした。

〈目次〉

はじめに

第1章 光輪に興味を持ったきっかけ

1-1 個人的な背景

1-2 ジャン・ポール・ゴルチエの光輪

1-3 学部論文と卒業制作

第 2 章 光輪の歴史

2-1 光輪とは何か

2-2 美術史の光輪

2-2-1 原始的な光輪の時代

2-2-2 西洋の光輪

2-2-3 東洋の光輪

2-2-4 美術史の光輪からわかったこと

2-3 抽象的な光輪とヒルマ・アフ・クリント

2-3-1 光輪の復活

2-3-2 初期抽象表現

2-3-3 抽象的な光輪

2-3-4 ヒルマ・アフ・クリント

2-3-5 アールヌーボーと表現主義における光輪

2-3-6 まとめ

第 3 章 現代における光輪の表現

3-1 光輪の新たな種類

3-1-1 現代化された伝統的な光輪

3-1-2 デザイン的な光輪

3-1-3 抽象的な光輪

3-1-4 まとめ

3-2 光輪が流行する理由

第 4 章 自作について

4-1 制作方法

4-2 作品コンセプト

4-2-1 修士課程修了制作

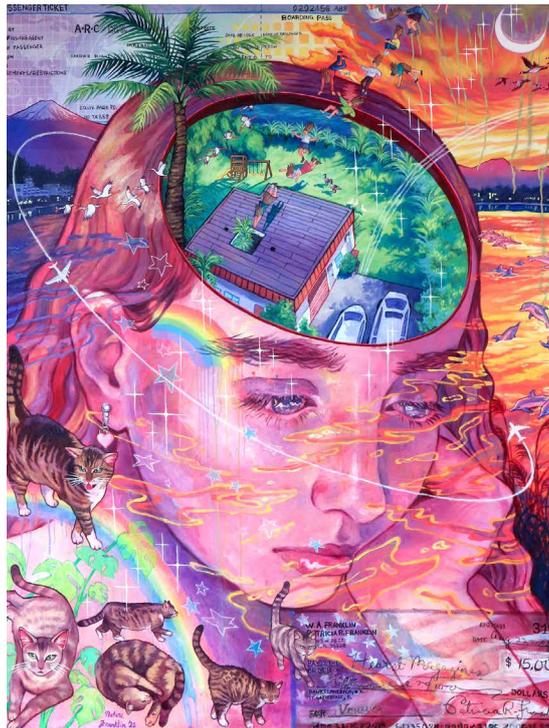
4-2-2 博士後期課程 1 年目

4-2-3 博士後期課程 2 年目

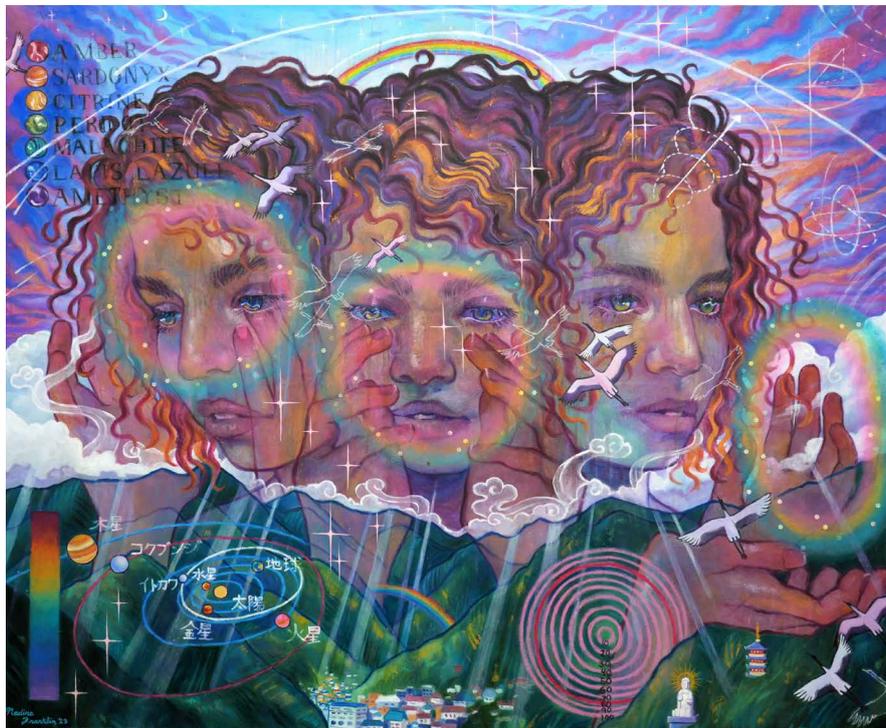
4-3 自作の中の光輪

おわりに

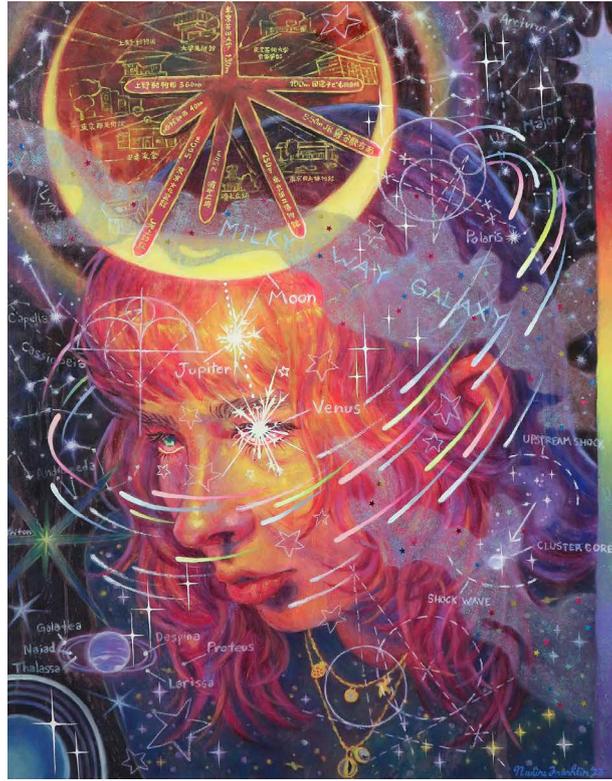
図版引用出典一覧



《Long Lost Memories》キャンパスに油彩とオイルパステル、F150号、2022年



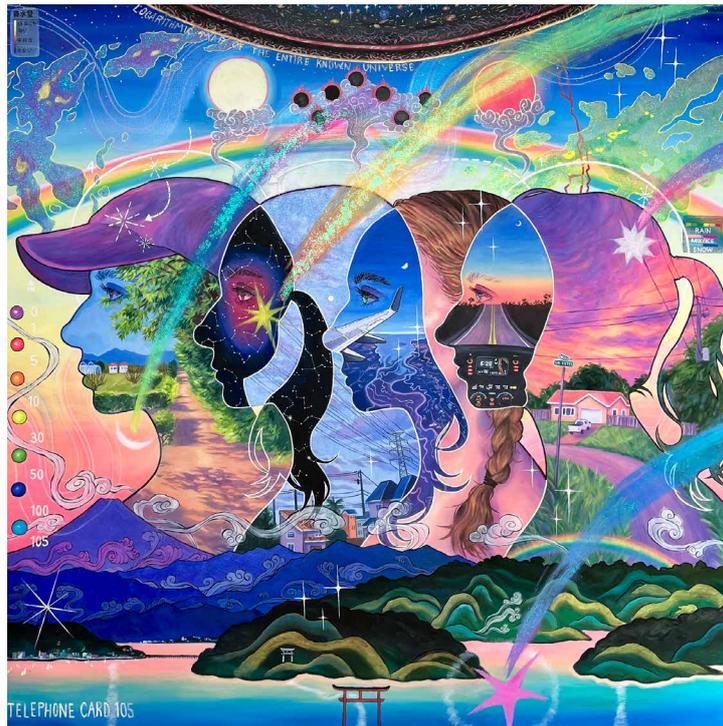
《山越》キャンパスに油彩とオイルパステル、F100号、2023年



《The Stars Align》キャンパスに油彩とオイルパステル、F50号、2023年



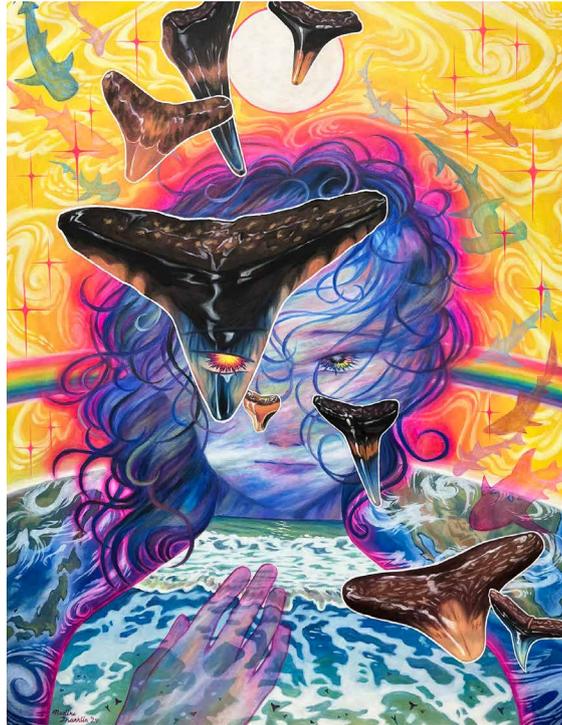
《夏はどこへ行ったのか》キャンパスに油彩とオイルパステル、F80号、2023年



《この道でいいのか》キャンパスに油彩とグリッター、S100号、2023年



《考えすぎ》キャンパスに油彩とオイルパステル、M100号、2023年



《サメの歯》キャンバスに油彩、F80号、2024年



《自信》キャンバスに油彩とグリッター、M100号、2024年